

「世界史版 百人一首」の作成

—学びの喜びを感じられる授業を目指して—

地理歴史科 小田原健一

昨年本校研究紀要第 45 号では、「楽しみながら覚える世界史 B 授業の実践報告」においてカルタを使った授業について報告したが、昨年度末から今年度にかけて、そのカルタから派生した「世界史版 百人一首」を使った授業に挑戦した。まだまだ改善すべき点は多々あるが、生徒達の反応も織り交ぜて、現状を報告する。

<キーワード> 学びの喜び 「世界史版 百人一首」 教科横断の可能性 当番ノート

1. はじめに

「学びの喜びを感じられる授業開発」は、本校が開催している高校教育シンポジウムの研究テーマであり、私自身も試行錯誤を繰り返している課題である。過去の実践の中で生徒の反応が良く、手応えを感じている授業の一つがカルタを使った授業である。この授業は、取り札（*「あ」～「わ」の言葉で始まる世界史用語）を教員側が指定し、それに応じた読み札を生徒が作成し、揃ったところでカルタ大会をするというものである。利点は適切な読み札作成のために、生徒は教科書やノートを使用して既習事項を調べる必要があり、知識の定着が図れること、他の生徒に伝わる文章を書く必要があり、表現力の向上が図れること等がある。そして何より、生徒はカルタの作成からカルタ大会まで、生き活きと取り組むことができる。次の表は平成 29 年度 2 年生に対してカルタ実施後に、世界史への興味は高まったか、学力向上に繋がると思うかを問うたアンケート結果の抜粋である。

	とても	ある程度	変わらない	やや低く	低く
質問 1 (興味)	18 名 (38.3%)	24 名 (51.1%)	5 名 (10.6%)	0 名	0 名
質問 3 (学力)	17 名 (36.2%)	28 名 (59.6%)	2 名 (4.3%)	0 名	0 名

この結果からも、多くの生徒が興味を高め、学力向上への手応えを感じていることがわかった。しかし、カルタの読み札作成は客観的な視点から文章を作成することになり、それでは物足りないという思いが私の中に芽生えてきた。これ以外の場面で行った授業アンケートでは、「世界史は、遠い昔の話と違ってしまい、想像しにくい。そして、覚えにくくなる。」という意見を書いた生徒もいた。そこで、カルタの次の段階として、生徒達が世界史をより身近な、現実のものと感じられるように「世界史版 百人一首」を作成することとした。

2. 世界史百人一首大会の実施

(1) 冬休み課題として

カルタを使用した授業のもう一つの課題として、授業中に読み札を作成していたため、完成までの時

6 私はね 神のことばで 預言者よ 迫害をうけ メディナへ出発だ

7 ありがたや 救世主が 立ち上がる 貧しき民と 忬度コース

上記6はムハンマドが取り札になっているのだが、生徒の作品は「私はね」ではなく、「ムハンマド」で始まるものだった。このような作品が5点ほど出てしまったので、訂正が必要であった。上記7の取り札はイエスである。作品自体は平成29年の世相も反映していて面白いが、第三者の気持ちから詠んでいる点や、この情報だけではイエスと判断し辛い（事前の一覧表がなければ判断できない）点が残念であった。

(2) 実際の授業

事前に5～6名のグループを示し（成績上位者から成績下位者までが各グループに均等に入るように編成した）、一首あたりの制限時間を30秒として百人一首大会を行った。図2は授業中の生徒の活動の様子である。



図2：楽しんでいる生徒の様子

私は読み手に専念していたため、撮影はこの授業に関心を持って参観に来てくれた国語科教員にお願いした。

(3) 生徒アンケートの分析

授業後には、カルタの時と同様に世界史への興味は高まったか、学力向上に繋がると思うか等を問うアンケートを実施した。その結果の抜粋が下の表である。

	とても	ある程度	変わらない	やや低く	低く
質問2（興味）	7名（13.7%）	23名（45.1%）	21名（41.2%）	0名	0名
質問3（学力）	10名（19.6%）	28名（54.9%）	13名（25.5%）	0名	0名

興味・学力の項目ともカルタの時と比べて、「とても」と答えた者が減り、「変わらない」と答えた者が増えている。一方で、カルタと百人一首のどちらが良かったかという項目では、カルタと答えた者が20名、百人一首と答えた者が28名であり、表の結果とは結びつかないものとなった。これは、既にカルタの授業を経験した生徒にとっては類似の取り組みである百人一首の印象が薄れたためと考えられる。

また、興味の項目での「変わらない」の増加が目立つが、自由記述では肯定的な意見や楽しかった等の感想を書いている生徒も多く、これはカルタから百人一首の約半年間で世界史への興味が全体として高まっていた影響もあるのではないかと。

生徒が自由記述で書いた意見には次のようなものがあった。

- ・カルタの方が百人一首よりも分かり易くて、素直に楽しめた。
- ・百人一首はクセが強いのだと全然わからない。
- ・全員の百人一首を見て、個性的で面白かったし、覚えるのも楽しかった。
- ・古典やその人物について調べることができて一石二鳥

上の2つがカルタの方が良いと答えた生徒の意見である。確かに誰の心情を詠んでいるのか判断し辛い作品も幾つかあった。この点については、生徒同士で事前に添削をさせて、作品の完成度を高めてから一覧に掲載することで改善できると考えている。下の2つが百人一首の方が良いと答えた生徒の意見である。古典についても調べたという生徒もいるが、古典の技法を駆使して和歌を作るなどのルールを設け、これもお互いに添削させることで教科横断的な要素をこの授業に盛り込んでいくことを検討している。この他、百人一首の方が良いという意見の理由としては、「冬休み課題だったので、じっくり考えることができたから。」、「はじめにみんなが作ったやつを配ってくれて、覚えやすくて良かったです。」などの実施方法に関するものも多かった。特に全員の作品をまとめた一覧表を活用して、覚えてから大会に臨んだ生徒が複数いたが、このような生徒は学力向上への繋がりを実感できたであろう。

3. 当番ノートの活用

平成30年度は、進級した3年生の世界史Bの授業を継続して担当した。しかし、受験生ということもあり、授業中に和歌を作らせたり、夏休み課題に課したりすることにためらいもあった。そこで、ここ数年、取り組んでいる授業記録ノートに代わって、和歌作りに挑戦させた。下の図3が昨年度までの授業記録ノートの例で、授業ごとに当番制で授業内容をまとめ、感想や次の担当者へのメッセージを書かせている。10年経験者研修で紹介してもらった事例を基として始めたもので、授業の振り返りとしてだけでなく、生徒同士の意見交換の場としても機能した。図4が今年度これに代わって試行した当番ノートである。生徒の負担を軽減するため、授業内容のまとめは無くし、授業内容の中から小テストを一問作成すること、授業で扱った人物の気持を推測して和歌を詠むこと、授業の感想を書くことを求めた。しかし、3つを求めたせいか、和歌への取り組みは私の期待通りにはいかず、誰の心情かわからないもの（読み取り辛い）、図4の2名もその例である）や、和歌に名前が入ってしまっているもの、五七五になってしまっているものなどが散見される事態となった。毎回、私も赤ペンで返答を書いているので、そこで指示した他、授業の冒頭でも2・3度注意を促したが、最後まで軌道修正はできなかった。今年度の当番ノートは生徒同士、あるいは生徒と私が意見交換する場としては機能したが、「世界史版 百人一首」作りの場としては消化不良のまま終わってしまった。やはり、課題として扱ったり、授業の中で作成させたりと、一つのことに集中させて、指示が通りやすい場を設けるべきであった。

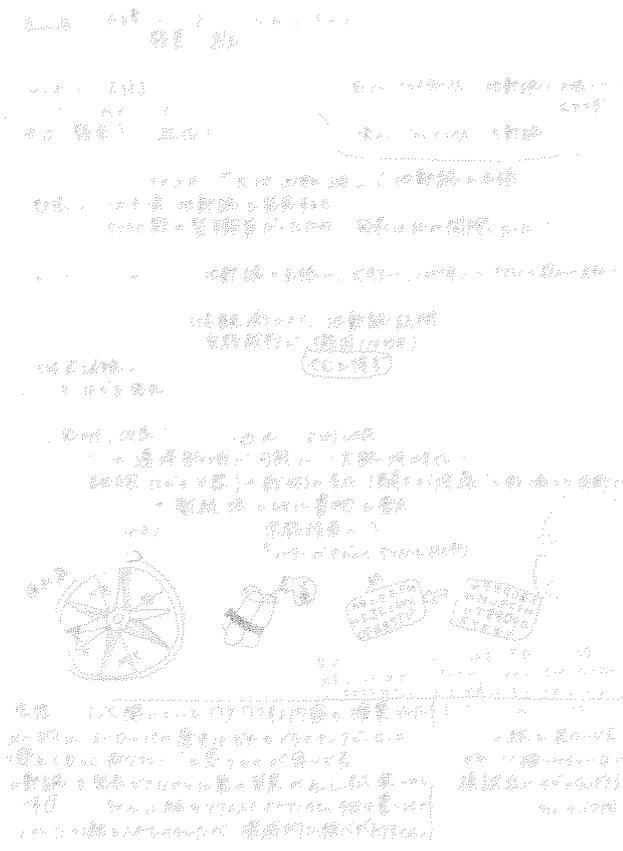


図3：昨年度の授業記録ノート



図4：今年度の当番ノート

4. おわりに

今年度の当番ノートの実践では成果をあげられなかったが、カルタも「世界史版 百人一首」も生徒の興味・関心を高め、学力向上へも繋げられる有効な方法であり、特に後者については、今後の活用次第で教科横断的な要素を盛り込むことができる。ここ数年、教科横断的な授業に取り組んで感じることは、生徒にとって有益だけでなく、教員間のコミュニケーションの材料ともなり、連携を深められるということである。次年度以降も「世界史版 百人一首」を活用して教科横断の可能性を追究していきたい。

5. 参考文献

小田原健一(2018) 楽しみながら覚える世界史B授業の実践報告 本校研究紀要第45号、pp15-21